



# 放課後

添嶋 讓

こうなることは わかっていたんだ  
ぼくは ここに いるべきじゃ ない  
はじめから わかっていたんだ  
きょうかしょの らくがきも  
いすのうえの がびょうも  
くつのなかの ぎゅうにゅうも  
みんな ぼくが きらいだっていう  
いしひょうじ なんだって

そんなに きらいなら  
はっきり いえば いいのに

がっこうが おもしろい なんて  
だれが いいだした んだろ

あした なんか  
こなきゃ いいのに  
にどと あした なんか  
こなくたって いい

けさ きみから  
こんなこと いわれた

「あしたっから ひとりで  
がっこうに いっても いい？」

いつかは いわれると  
おもってた その せりふは  
いつになく ぼくを  
すなおに しょうだくさせた

「うん いいよ」

きみが ぼくと がっこうへ  
かよう みちすがら  
ぼくの はなしを きいてないで  
ちがうことを かんがえて  
だれかに あうことを  
ねがって いたことを  
ぼくは とっくに  
きづいて いたんだよ

きみは やさしいから  
ずいぶん なやませて  
しまったのかも しれないね

ぼくの へんじを きいて  
きみは ほっとした かお  
ぼくは のどのおく  
いやだ という ことば  
のみこんだ

今日は朝から雨が降っていた  
ふるぼけた教室で、僕達は英語のプリントを解いている

たいくつなこった  
はやくおわんないかな

先生は暇をもてあましたのか  
何やら話しはじめた

最近話題のあの病気  
正式名称を黒板に書き出す

まわりのみんなはにやけたかお  
ぼくのほうをちらちら みる

「でも、ホモの病気なんでしょ？」  
そう 誰かが言うと  
先生は 笑いながらこういったんだ

「ま、この中じゃ お前がいちばん かかりやすいんじゃないか？」  
僕は、無視してプリントにむかう

わらっていただけましたか？  
たのしんでいただけましたか？

病気の話は まだまだつづく  
みんな 僕をだしにしている

「前からそういうヤツだと思ってたんだ」  
「気持ち悪ーい」

その割に みんなの顔は楽しそうで  
プリントは どうなったんだ、プリントは

心のなかが がさごそしだした  
僕は、それでも 平静を装う

でもね、せんせい

あのびょうきはたいえきこうかんでも  
しないかぎりうつらないでしょ？  
でもってぼくは まだ どうていですよ  
もしもほんとうに そのびょうきなら  
ぼくとかかわってくれる ひとが  
いるってことですよ  
じつはそのほうが しあわせなのかも

みんなが 僕を笑っている  
君でさえも 僕を笑っているんだ

ああ、今日は掃除をさぼって早く帰ろう

この単語の意味ってなんだっけ？

君だけには言われなくなかったのに  
どうしてそういうこと言うかなあ

嫌いならはっきりそういえばいいのに

僕はなにがしてしまったんだろうか？

ねえ、なんとか言ってくれよ

僕はなんなんだ、あんたらにとっていったいなんなんだ！！！！

僕はその時 あることを思い出した  
それは 小さい頃見た夢

今と同じ情景 今と同じ状況で  
僕は、みんなに追い詰められて

後をふりかえると黒い大きな穴があって  
そこに落ちてゆく  
そんなそんな夢だった

たしかみんな よろこんだんだよな  
じゃまものはさったってさ

鉛筆も 思考能力も停止した頃

何も考えてないチャイム

僕は プリントを叩きつけ

ガンとばしながら教室をあとにした

まだ 雨は 止みそうにない

もらったのは あんまりきれいじゃない色  
本当は僕だって きれいな色がほしかった  
でも みんながあんまり嫌そうな顔をするから  
仕方なしに それで折った 千羽鶴

せめて 人一倍きれいな形に つくろうと  
ていねいに 折って 先生の前  
できた鶴を もっていくと

「もう少し きれいな 色で  
折れないものかい？  
それじゃ あんまり きれいに見えない」

そうだよな 先生  
もっと みんなに いってやってよ  
僕だって きれいな色がほしかったんだ  
でも もらえた色は こんなに暗い色ばかり

みんなの方を 振り向くと  
自分たちのせいじゃないって 顔で  
きれいな 色の 千羽鶴を  
何だかとても 楽しそうに

ああ、こういうときに  
どうにもできずに つっ立っている  
自分を 嫌いになりそうで

せめて この鶴だけは  
みんなのなかに 入れてください  
でないと でっかくきれいにできたのに  
仲間外れはかわいそうです

提出はしたけれど  
まとめられた 中には  
僕の作った 千羽鶴  
どうやら入っていないみたい

気になって さがした ごみ箱のなか

捨てられていたのは 僕が作ったやつ  
だれにも 見つからないように  
そっと 助けて ポケットにしまった

「きれいな色が ほしいなんて  
わがままいうから 罰があたったのかな」

だれにいうわけでもなく つぶやいた  
だって 僕が作ったのなら 何色のだって 同じだよ  
とにかくそう いいきかせて  
だれもいなくなった 教室を あとにした



ぼくは いつも  
だれかれかまわず はなしかける  
きいていようと いまいと  
そんなことは おかまいなしで

あるひ とつぜん きがついた  
もしかして だれもきいて いないのでは？  
あいづちを うつわけでもなく  
きょうみを しめしているわけでもない

もしかして ひとりでしゃべってる？  
とちゅうで はなしを やめて  
みんなのようすを うかがってみる

だれも きいてないじゃん  
あったりまえだよね ぼくのはなしなんか  
きいてたって つまんないもんね

だから かれはぼくと がっこうにかようのを  
やめたのでは なかったのか？  
きづいたときには すでに おそく

「あいつは ひとりで ぶつぶつと  
なんか いってるから きもちわるい  
よらないほうが いいよね  
むししちゃったほうが いいよね」

そんなふうに いわれてた  
なんて こった どういうことだ  
きいているか きいていないかなんて  
はじめから わかっていたはずなのに

いつからか きいているものだって  
おもいこんでいたなんて

こういうのって ひとりよがりって  
いうんだよね たしか  
こんどからは だまっていよう

そのほうが みんなのため

そのほうが じぶんのため

かたいけっしんの わりには

あつというまに ぎゃくもどり

あいかわらず ひとりで しゃべる

だれも きいていなくても

おかまいなしで

もし、僕が女のコだったら

こんなに苦勞はしなかったのでしょうか？

学校から 帰ろうと思ったら  
雨が 降りだした

かさ、持ってきてよかった  
たまにはラッキーじゃん

みんなは もう帰ったのか  
だれも いない 玄関

終わったあとの 世界の  
中学校の 玄関って  
きっと こんな感じだ

だれも いなくてさ  
外だけが やけに明るい  
そこにだけは 幸せがあるような

「おーい」  
と、誰かの声がする  
「？」  
あたりを見まわす 僕に  
ちかよってくる 人影

「どうしたの？」  
「かさ、入れて 途中まででいいから」  
「うん・・・いいよ」  
「待ってたんだ、ずっと くるの」

待ってたんだ なんて  
いわれるなんて 思ってなかったから  
ちょっと 緊張 少し 動揺  
あの、これって 喜んでもいいかな

話したことばは 二言 三言  
でも うれしかったんだ  
君と 一緒にかえられるなんて  
考えたことなかったから

本屋の前まで きたら  
君は かさをぬけて  
雨のなか 走りだす  
「サンキュー じゃあなっ」

落ちついて 考えたなら  
必要だったのは 僕じゃなくて かさのほう  
でも こんなにうれしくなれるんなら  
にわか雨も 悪くない

いいたいことと ささやかな願い  
ホントは 口にしかかったけど  
今日くらいは 雨と一緒に  
側溝に 流しておこう

・・・明日も にわか雨  
降るといいな 降らないかな

飛び降り自殺のニュースが駆け巡ったその日  
僕は本屋で「自殺論」を立ち読みしてた  
昨日見た夢は だれにも相手にされてない自分  
「ひとりであるってなんて気が楽なんだろう」  
学校の階段で一人つぶやく

今日の昼ご飯は一人で食べた  
いつもながらおいしいはずがない  
みんなは僕のほうを見て見ぬふり  
僕は上目づかいにまわりを見わたす

ため息さえも出せない気分

体育の授業は失敗ばかり  
運動神経のよさは人柄のよさか？  
だったら僕は最悪な人間かも

理科の実験の失敗は僕のせいらしい  
ほかのやつらは見てるだけだったのに  
なにもしないで文句だけはいうなんて  
そういう立場が少しうらやましくて

帰りがけ あんまり自分が情けなくて泣いた  
誰にも見つからないように  
焼却炉の近くで泣いた

で、今 君が本屋に入ってきた  
声 かけたいんだけど  
きっとあまりいい気はしないだろうから  
このまま盗み見てることにする

君が気づいてしまう前に  
やめてしまわないと  
君が嫌な顔をする前に  
早く僕を終わらせないと

ひるやすみ

おくじょうに のぼって

そらを みていた

きもちがわるいほど あおくて

すぐに うつむいて

こうていでは みんながサッカーを

はしゃぐこえが みみざわりで

フェンスを にぎりしめて

とらえられた しゅうじんのよう

いま ここで ぼくが いなくなったら

みんな どう おもうだろうか

なんて おもっては

わらっちゃう ばかばかしくて

しんこきゅう さんかい

ここから とびおりたことにして

いまから もうちょっとだけ

がんばってみよう

彼女が泣いている

理由は

「僕は彼女を好きであるらしい」

と いうことらしい

いったいどこがどうなって

そういう話になったんだか

僕は確かにさっき

好きな人の名前をむりやり

いわされたけれど

間違っても彼女なんかじゃない

「あいつにスキになれるくらいなら

死んだほうがましだ」

と 彼女は泣いているらしい

だったら 死んじゃえば？

僕の顔見なくてもよくなるんだから

こんないいことないじゃないか

彼女だって 本当は

「ナマイキナオンナ」

と いわれていることは知らない

みんな慰めているような顔して

ほんとうは心の奥で

彼女のこと笑ってるんだ

自己中なヤツって

これだから嫌なんだよな

ほんのちょっとだけ

自分のことを棚に上げて

ばかにしてみた 気分だった

ああ、ほら、いまから嫌いな音楽なのに

余計なことで気分を滅入らせるなよ



もうすぐ取り壊される木造校舎へ忍び込んでみた  
ぎしぎし ぎしぎし 床が鳴って  
誰もいないはずなのに 誰かいるような  
そんな 不思議な感じがする

去年までは ここで さんざん泣かされてたのに  
今じゃ もう どうでもよくなって  
それでも まだ 笑うわけにはいかないけれど  
なんとか 生きてる 今日この頃

ほんとうは みんながどう思ってるか  
知ってるんだから 無理して学校なんか  
来なくたっていいことも わかってる

いっそ この校舎といっしょに  
壊されてしまったって

でも でもね  
僕だって 強くなりたい  
強くなりたかったんだ  
みんなのいうことなんか笑い飛ばせるくらい

もう ムリかなって 思う  
まだ 大丈夫って 思う  
どっちが 本当なんだろう  
どっちだったら 僕は 救われただろう

大声で 木造校舎に問いかける  
「ぼくは、どうしたら、いいんだろう」  
ぎしぎし ぎしぎし 答えてくる  
なんて いったるのかは わからない  
でも 壊される日までには わかるって  
いったるみたいだ

そうだね ありがとう  
木造校舎が壊される その日まで  
ゆっくり考えてみるよ

夢の中で 手紙をもらった  
知らない子からだった

封筒の中身は  
真白い便せん  
見る見るうちに血がにじんできて

「呪い殺してやる」

そこで 目が覚めた  
夢でよかった と  
思うべきか

夢の中でまで と  
思うべきか

鏡の前 自分の顔

「女々しいやつ」

つぶやいてみる

「お前なんか、嫌いだ」

反芻する言葉

あざ笑う みんなの顔

思いだしてみる

「女々しいやつ」

「お前なんか、嫌いだ」

もう、疲れたよ

帰りがけ 玄関の前で  
靴ひもを直すふりをして  
君のこと 待ってみる  
たしか 昨日で部活は  
終わりのはずだから

いつもあんまり話したりしないから  
かえろうって 誘ったら  
不思議な顔 するかも知れないけど  
今日だけは 思いきって

いや、ほんとうは  
誰でもよかったのかも知れない  
もしかしたら  
「誰かのことを待っている自分」  
というのを 楽しんでいるだけかも

キョウハ、ホントウニ、イイテンキ

階段の辺り こしかけて  
君を待つ それだけが なんだかうれしくて  
他のみんなのことも 今日だけは  
うらやましくなんか ない

もうすぐ 夏休み  
最初で 最後の勇気を  
僕に ください

きょう せんせいに  
うそつき って いわれた  
ん だよ

けいじぶつ が かたむいて  
ないか きかれて

「だいじょうぶです」

って  
こたえた だけ なのに  
ほんとは ね かたむいていた みたい

でも おもった とおり いった  
だけなのに あんな ふうに  
いわれ なきゃ いけない なんて

ぼくは うそつき です

こんどから そう いうことに  
しょう かな なんて

こころ にも ない こと を

もしかしたら みんな も  
そう おもって いる の かも  
せんせい で さえ おもって  
いる ん だから

あしたから なつやすみ  
きみにあえない さみしさと  
あいつらにあわなくてすむ うれしさ  
てんびんにかけてみる

なんだか ほっとしている じぶんがいる

ほんとのじぶん とりかえすため  
とりあえずわらってみようとおもう  
なんてったって なつやすみ  
だれにも かんしょうなんかさせないから

友達と遊んでくる と  
嘘をついて 外に出る

余計な心配をかけないように

公園でひとりブランコに乗る  
高く 高く もっと高く  
このまま 空に飛んでいってしまうくらい

グラウンドの向こう  
野球をしてる 人がいる

そういえば 今日は  
僕のせいで サッカーは負けた  
ずいぶん 殴られたけど  
仕方なかったのかな

「ピッチャー 3球目を投げましたっ  
・・・ボールっ」

この前は 僕がいなかったから  
勝てたらしい と 誰かが

やっぱり 仕方なかったのかな

ブランコをこぐ ちからもなくなって  
自分の情けなさに 泣きたくなくて  
このまま どこかに 消えたほうがいいのかな  
そう思って みたりして

家に帰ったら 「なにして遊んだの？」 と  
聞かれるだろうな たぶん  
勝てなかったけど 野球をしたよ って  
いうことにしよう

心配かけたくないから  
とりあえず そういっておこう

僕がおとなしくしている理由かい？

僕がはしゃぎだすと 決まって

みんなが ひいてゆくからさ



今日の給食は  
あげパンと ラーメン  
デザートはフルーツポンチだ

でも僕の目の前には  
なにも残ってないんだ  
みんなも好きな給食の日は  
いつもとられちゃうんだ

ちくしょう  
たまには好きな給食  
全部食べてみたいのに

泣かないでとりかえす方法  
なにかないかな  
(ここで泣くのはしゃくなんだ)

悲しいことがあっても  
なにかに感動しても  
うれしいことがあっても  
くやしい結果に終わっても  
泣かなくなったのは  
あの時一生分の涙を  
流したせいなのと  
あと きみに  
「男のくせにぴーぴー泣きやがって」  
って いわれたからだと思う  
ちょっとだけ感謝してる

きのう彼が飛び降りた  
どうしてこんなことになったか  
なんとなくだけど想像がつく

学校中が大騒ぎしているのに  
あいつらはへらへらと  
新しいおもちゃを探してるんだ

たまにしか話さなかったけれど  
それでも相談にのったりしてたのに  
僕にさえ言えないことがあったのかい？

このやり場のない怒りをどうしたらいいんだろ  
僕は今日初めて誰かを殺したいと思ったよ

一人で食べる給食はおいしくない  
たまについてくるデザートは全部とられちゃうし  
誰かと机をあわせた記憶もない

勇気を出して仲間に入れてっていったら  
露骨に嫌な顔された  
これも自分のこと考えたら仕方ないのかな

みんな楽しそうだな

余計なことを考えたら  
胸がつまって 食べられなくなるから  
いまはみんなの話を聞きながら  
楽しく食べてるふりでもしよう

きっとこのままだと早く食べ終わるな  
もう少ししたら図書館へでもいくことにして  
みんなの邪魔にならないように  
この雰囲気をごわしてしまわないように

小学生の頃、毎日プロレス技をかけられた時期がある。  
夜中になるとTVでやっているプロレス番組。  
小うるさいアナウンサーの「ファイヤー」の声。  
そんなものをまねしては喜ぶ子供。あいつらのことだ。  
今日の新技と称しては危険なまねをする。  
誰も止めない。止めやしない。  
プロレスなんかに興味などなかった僕にとっては  
そのすべてが苦痛でしかなかった。

\*

ある日教室の中でかけられた「逆えび固め」。  
僕の体重の倍はある彼はニコニコと僕に近づきながらこういった。  
「お願い。一回かけさせて」  
そういう問題ではないことはすぐにわかる。  
僕には、しかし、拒否する権限などなかった。  
ずしり、と彼は僕にのし掛かる。  
ばき、と背骨の鳴る音。あ、死ぬのかな、と思った。  
(もちろん、それくらいでは死ぬことはないのだが、  
当時「いつか死ぬんだろうな」と漠然と考えていた僕にとっては  
この瞬間は明らかに「死への入り口」だったのだ)

泣いた。いつものことではあるが、いつも以上に泣いた。  
周囲の「またかよ」という顔。  
僕の居場所など、ここにはありはしない。

\*

となりのクラスでプロレスごっこをしていて  
脳しんとうを起こした少年がいた。  
これで、禁止になれば僕は救われる、と思った。  
心の底からそう願った。禁止してほしい。  
(普段はなにかと簡単に禁止にしてしまうことに対して  
不満を持っていたが、このときばかりは別だった)

が。教師達が用意した答えは一枚のすりきれたカーペット。  
これを敷いてやれ、ということだった。  
そんなもの一枚で何が変わるものか。

誰か死なないとダメなのかもしれない。そしてそれが僕なのかも。  
どうしようもなく暗い考えだけが頭の中を回る。

今日も昼休みになれば、いつものようにプロレスごっこが始まるだろう。  
僕はまた誰かの「実験台」「練習台」にされる。  
このままこの苦痛が続くくらいなら、  
いっそ殺されてしまったほうが楽なのに。  
そう考えてはため息をつく僕に声が掛かる。  
腕を強引に引っ張られて、連れていかれる。  
今日はどれだけ泣かないでいられるか。それだけが不安だ。

\*

そんなわけで、いまでもプロレスはあまり好きではない。  
ま、そんなこと知ったこっちゃないと思われるだろうが。

「僕のいうことなんか、嘘ばかりなんだから  
いちいち信用しないほうがいいよ」

「俺はお人よしだから  
お前みたいなやつ見てるとどうしても心配なんだよな」

「今日、遊びに行くね」

ちゃんといたのに

なにも 真剣に嫌そうに

「ほんとにきたの？」

って いうことないじゃない



おんなのこが ぼくを なぐる

みてると いらいら するらしい

ぼくが おんなのこを なぐる

このままじゃ しんじやいそうだから

でも おこられるのは いつも ぼく

この ちがたって なんなんだろう

彼がビルの屋上から飛び降りた  
それが何故かは誰も知らないことで  
興味本位のマスコミは  
一様に成績不振を理由だと書き連ねる

学校からの発表は いつだって  
「自殺する理由がわからない  
そんなそぶりは見えなかった」

けさの集会はいつもよりも退屈で  
校長先生はことさら命の大切さをといていた

一番 粗末にしていたのは誰だったんだい？

先週 相談室を訪れたときは  
僕の悩みは一笑に付された  
「そんなこと考えてる暇があったら  
単語の一つでも覚えなさい」  
先生、確かにあなたはこういった

僕にとっては英単語よりも切実だったのに

彼の声は聞こえたかい？  
僕の声は届いているかい？

やり場のない怒りも  
行く宛のない不安さえも  
僕たちにはもう どうすることもできなくて  
塾帰りのゲームセンターに  
自分の姿を投影させるだけになって

そしてそれが僕たちの生きる道なのでしょうか？

学期始めの楽しみは座席替え  
今度こそは君の側になりたくて  
アンケートの文字も  
いつもよりていねいに書いてみる

「近くの席になりたい人の名前 二人  
近くの席になってほしくない人の名前 一人」

これが 今度のアンケートの中身  
クラスの中は蜂の巣をつついたように騒がしく  
誰がいいとか、悪いとか  
近くに座ろうね、なんて約束も

僕は自分の希望を書きだしたあと  
ほんの少し冷静になって考える

ボクノ ソバニ スワリタイ ヒトナンテ イルノカナ

前の時は誰かが寄ってきてこういったんだ  
「お願いだから あたしたちの側になんか来ないで」  
その時は 何いってるんだか っていう感じで  
少しも そんなこと思いつきもしなかったけど  
そうか、あれはそういうことだったのかもしれないな

「じゃ、書けた人から前に持ってきて」  
先生の声が聞こえる

誰も行かないのに 僕がいくと  
また なにかあるといけないから  
もう少しだけ 鉛筆をもって  
悩んでいるふりでもしていよう

そして 君が  
「近くにきてほしくない人」の欄に  
僕の名前を書かないようにお祈りでもしていよう

では 自分はどうかを考えてみることにする

誰かに迷惑をかけてはいないか  
自分はうそつきではなかったのか  
そばにちかよると嫌な顔をされたのではなかったか？

僕はみんなに嫌われて当然だったのではないか？

誰かが僕に好意を寄せてくれる  
それだけでよかったのではないか？

僕はかくも貪欲な生き物だったのか

君にそんなふうになると 僕  
どんどん甘えてしまって わがままになって  
昔の記憶も 死にかけたことも  
全部 あれはなかったことにしてしまったりとか  
そんなのは いくらなんでも

自分勝手に過ぎる ということか？  
本当はどうかのだ？

放課後 教室に一人 残って  
校庭でボールを追っている君を見ていた僕を  
君は何度も見つけてくれた  
手を振ってくれた  
僕は 一度だけしか 手を振りかえせなかった

後悔の中で 僕は  
本当は自分をどうしたかったのかさえ  
見失ってしまったようだ

大人になったら何になりたい？  
なんて無責任な言葉だろうと思ったのに  
いまはそんなこともわからなくなっているんだ

もうすぐ 卒業なんだね  
もう 君には会えなくなるんだね

僕のことなんか 忘れちゃうのかな  
僕は君のことを 僕は君のことを

いまここで消えてなくなってしまう方がいいのに  
そうしたら 僕は

誰かに 喜んでもらえたのだろうか？

それとも 僕に引導を渡してくれる  
誰かが いるのだろうか？

何の感慨も感激もないまま  
卒業式が終わった

これからどうしようかなんて考えるのも面倒で  
そういえば試験の結果も聞いてない

春から僕は一人で生きてゆく  
誰も知らない街で一人で生きてゆく

君にはもう会えなくなるから  
それだけが少し寂しくて

あの時 君は 僕に  
学校もまんざらじゃないと教えてくれた

君になにかいいたくて  
でも なにもいえなかった僕は

カメラのファインダーをのぞく  
君の左斜め後ろ 遠くから  
君は笑って 少しうつむいて

あふれかえる 人の中  
君を見失わないように

そしてすべてを封じ込めよう  
ココロの中に  
フィルムの中に

放課後

<http://p.booklog.jp/book/11276>

著者：添嶋 譲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/literary-ace/profile>

発行：言葉の工房 ( <http://literary-ace.littlestar.jp/> )

初出：1996年 Nifty-serve 詩のフォーラム 4 番会議室

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/11276>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/11276>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社ブックログ